

僕の名はサダハル。都会のど真ん中に住んでいる猫だ。ドイツ語で言うならシュタットカッツェといったところだ。

築60年の少々古びた家に寄宿している。

この家にはじーじが住んでいて、僕はじーじと一緒に暮らしている。そのうち長男夫婦が同居する予定になっている…、らしい。

長男夫婦には二歳になる^{じょうたろう}常太郎という息子がいて、僕はこの常太郎と仲が良いのだが、常太郎のママとはうまくいかない。

はっきり言わせてもらえれば、僕は見栄っ張りな女は嫌いだ。僕がそう思っていると同様に、当然向こうも、こんな^{うさんくさ}胡散臭い猫は嫌いだと思っているにちがいない。

しかし、僕は決して胡散臭い猫なんかじゃない。少し変わってはいるけれど…。

なにをそんなに力を入れて自己弁解しているんだって？

そりゃそうだね。

僕は今のところ、じーじの次女のちーちゃんに毎日食事を作ってもらっているのだが、そうすると、今度は常太郎のマ

マに食べさせてもらわなければならない事になる。

それは由々しき事態で、今のうちに媚^{こび}でも売っておいた方がいいかもしれない、などと思案している訳で、それならいっそのこと家を出て野良猫にでもなろうかとも思っている。

しかし、僕は根っからの家猫でそんな勇氣も無いような気がするし、案外見かけほど^{たくま}逞しくはないのだ。

見かけがそんなに逞しいのかって？

いちいち^{うるさ}煩いな。

僕はいつも通り、ちーちゃんの作った朝食をたいらげると、いつも通り朝の散歩に出掛けることにしている。

このいつも通りというのが肝心なところなのだ。僕は、ちーちゃんの作ったご飯は必ず全部平らげることにしている。それがエチケットだし、そうしておかないと、いつ何時機嫌を損ねて、僕の食事が悲惨な事になりかねない。メニューの質が落ちるだけならまだしも、量が減るとか、まるっきり作ってもらえないとかいう状況に陥っては、死活問題になってしまう。

まあ早い話がごますりが必要だ、ということなのだ。

そんな訳で、僕は朝食をきれいさっぱりと平らげると、縁側から庭を通して外へ出た。

ちなみに、今日のメニューは鰹節ご飯に、じーじの朝食のおみおつけをぶっかけたものと、ハムエッグの端切れ少々だ。シンプルな食事だが、僕はそいつが大好物なのだ。

僕は通りに出ると、そこはタイムカプセルのようなじーじの家から、突然にコンクリートの味気のない世界に迷い込んだ感覚になるのだが、いつもの通りの隅っこを遠慮がちに歩き、なんで遠慮がちなんだって？そりゃそうしないと、車やら、その辺を引っ切り無しに駆け抜けるフォークリフトに轢かれてしまうじゃないか。

ちなみに、ここは公道の筈だけれど、なんで危険な鉄の爪をおっ立てたリフトが我が物顔に走り回るのか、どうも解せない。

今日はまだ朝早いので、車が少し走っているだけで、フォークリフトは横切らない、それだけでも緊張感はやや和らぐ。

僕は、その通りを抜けるために、いつもの路地に入った。

前にも言ったが、そこは路地といっても僕にとっての路地なだけで、単なるビルの隙間なのだ。

その路地には、ちょっとしたがらくたが落ちていたり、ねずみやゴキブリがうろちょろしている。ゴキブリはいいのだが、僕はどうもねずみは苦手だ。奴らは薄汚れていて、気忙しくて、上品な猫の僕とはおおよそ^そ反りが合わない。

さっきの話じゃないけれど、どこが^{たくま}遅^{おそ}いんだって？
ほっといてくれ。

僕は路地を抜け、ちょっと賑やかな通りに出た。

とは言っても、早朝のことなので、そんなに人が通っている訳でもない。早出の勤め人や通学途中の小中学生とかが、ちらほら見えるだけだ。

僕がいつもの散歩道を歩いて行くと、道路の端に整然と植えられている街路樹の^{けやき}欒の新芽が開いて、少し新緑になっていて気持ちがいい。

おまけに風もちょっと吹いていて、僕の髭を揺らしている、といった風情だ。

向こうから中学生のゆきちゃんが歩いて来る。

ゆきちゃんは、紺色のブレザーに白いブラウス、赤い細いネクタイ、同色のスカートに、大きな横広の紺の鞆を^{しよ}背負っている。

なにからなにまで紺づくめなのだが、バランスは取れていて違和感はない。

ゆきちゃんは軽快に足を運んで、僕の方へ近づいて来る。足取りは軽快なのだが、なぜかゆきちゃんにはもたつき感とといったようなものが感じられる。それは、ゆきちゃんの風貌からきているのかもしれない。

ゆきちゃんは少し太っているが、でぶと言う程ではない。ちょっと下半身がでぶ気味で、顔もどちらかというところとふっくらとしている。そんなことが、ゆきちゃんの動作をいちいちユーモラスに見せているのかもしれない。

ゆきちゃんは僕を見つけると、細い眼をいっそう細くして嬉しそうに笑った。

「あ、サダハルおはよう」

ゆきちゃんは僕の名前を呼んだ。

「おはようゆきちゃん、今日は早いね」

「学校の行きがけに、パン屋によらなくちゃならないからね」

「そうか、今日はパン屋に寄る日か」

ゆきちゃんのお母さんは看護師さんで、定期的に夜勤の日がある。そんな日は、昼ご飯に、通り道のパン屋でパンを買って行かなければならない。今日はそんな日らしい。

ちなみに、ゆきちゃんの通っている学校に給食はない。

「じゃ、僕も一緒に行っていかな」

「いいよ」

ゆきちゃんは僕と話ができる数少ない人間の一人だ。

僕とゆきちゃんは連れ立って、僕はゆきちゃんの横に隠れるようにして、学校の通学路をそちらへ向って歩いた。

パン屋は、通学路の途中の三差路になっている所にあった。

まあまあ新しい門^{もんがまえ}構で、いや門構なんていうもんじゃないな、ちょっと洒落^{しゃれ}た小粋なベーカリーショップだ。しかし店の歴史は古いらしい、老舗^{しにせ}というやつで、なかなかの評判らしい。

今日はどうもらしいが多いような気がする。僕の確^{かくしょう}証やら、自信なんてこんなものかもしれない。

僕達が店の中に入っていくと、店員の若い女の子が声をかけた。

「ゆきちゃん、おはよう」

そして、僕と一緒にいるのに気づくと、おどろいた顔をしたけれど、すぐに僕を無視した。ゆきちゃんが時々連れてくる猫だと認識したようだ。

店内は明るく、外に向かって全体がガラス張りで、パンの陳列棚が整然と並んでいる。中には朝食のパンを求めて、比較的年配の客やら、主婦といった客やらで賑わっていた。

ゆきちゃんは、あれこれと昼食のパンを物色^{ぶっしょく}していた。

昼ご飯なので、惣菜系が多いが、一つは甘いパンを買うことにしている。

レジには人が並んでいて、忙しくレジのお姉さんがそれを打っている。

しかし、このレジのお姉さんが曲者^{くせもの}で、実を言うと、早朝のアルバイトに来ている常太郎のママなのだ。

常太郎のママは26歳なのだが、細身で色白の美人なので、年齢より随分若く見える。そんなこんなで、意外とお客さん

にファンが多く、わざわざ20も30もパンを買って、その間、ママの顔を見てニヤついているおじさんも居るくらいだ。

しかし、大抵その目論見^{もくろみ}は徒労に終る。

なぜなら、ママはピアニストで頭の回転も速く、なにしろ32分音符を叩く指先で、あっというまにレジを打ってしまうからだ。

ママのレジを打つ指先は、僕の目にさえよく見えない。

「えっ、もう？」

そう言って、目を白黒させているおじさんを見たことがある。

ゆきちゃんは、トレイに乗せたパンの支払いを済まそうと、レジに並んでいた。

その列を、ママは何食わぬ顔で滑らすように捌^{さば}いて行く。実際、ママの指先はレジキーの上をなぞっているだけにしか見えない。

横っちょから、年配のおばさんが、独特のしわがれ声で話しかけている。

「これ、おいくら？」

おばさんは、この辺りに住んでいる人で、国会とやらで大臣をやっているらしい。

ママはそれに答えながら、ひたすらレジを打ったり、パンを袋に詰めたりしていた。

僕とゆきちゃんは、ママの前を通過して支払いを済ませると外に出た。その際にママは僕の方をちらっと見たが、それが僕だとは気付いてはいない様子だった。

もともと、彼女は僕のことなんかに興味はないのだけれど。

店から通りに出ると、さっきよりは人通りが増えていて、そろそろ通勤のサラリーマン等の姿が見えた。

ゆきちゃんは、制服のポケットに手を突っ込んでごそごそやると、片手一杯のパンの切れ端を取り出して、僕の前に並べてくれた。

切れ端と言っても、ちゃんとした総菜パンやら菓子パンを切り分けたもので、試食の皿に盛ってあったものだ。

僕はこれが目当てだったのだ。

「それじゃ、私、行くからね」

ゆきちゃんは、そう言って僕に背を向けた。

僕はしゃがみ込んで、目の前のパンにかじりついた。

このパンはなかなかいける。

ゆきちゃんは学校へ行くと、にこにこして会う人^{みんな}皆に挨拶する。だから、^{みんな}皆はゆきちゃんのことが嫌いではない。

嫌いではないが、人気者という訳ではない。ゆきちゃんは万事控え目で、活発で目立っているということもなければ、成績がいいということもない。

ゆきちゃんは、窓際の自分の席に着くと、大きな鞆を机の横っちょに引っかけた。

比較的まだ早いので、教室内にクラスメートはまばらだ。

「ゆきちゃん、おはよう」

ゆきちゃんの背後から友達のさきちゃんが声をかけた。

「あ、さきちゃん、おはよう」

ゆきちゃんは、その人懐っこい笑顔をさきちゃんに向けた。

^{ばんじ}
「万事ご機嫌さんかしら？」

「なにそれ」

「ゆきちゃんを見てると、何時^{いつ}もそう思うのよ」

「そうかなあ」

「そうよ、それはとても大切なことなのよ」

「お父さんが言ってたわ。人生の勝利者てのは、どれだけ楽しいと思えるかだって」

「勝利者にならなくてもいいような気もするけど…」

「そうね、でも楽しいに越したことはないんじゃない？」

さきちゃんは優等生で、いつも ^{むつか} 難しい事を言う。

「まるで、哲学問答だな」

隣の席に居る、クラス委員のひかる君がぼそっとつぶやく。

「ところで、ゆきちゃん、今日放課後ひまかしら」

「なに？」

「夕方、5時からバレエの公演があるのよ。親戚の子が出演するからお母さんで行く事にしていたんだけど、お母さんが別の用事ができちゃって…、それでゆきちゃん一緒に行ってくれないかと思って」

「あ…」

ゆきちゃんは細い眼を伏し目がちに横に振って、しばらく

考えた後。

「バレエか、行きたいな、私踊りすきだもん…」

「でしょ、ゆきちゃん踊り上手いものね」

さきちゃんは、もう決まりと言わんばかりににっこりと笑った。

「えー、でもだめ。家に帰って洗濯しなくちゃいけないもん」

ゆきちゃんは、肩を落として首を前に突き出しながら、唇の薄い大きめの口の両端を吊り上げて、照れ臭そうに笑った。

ゆきちゃんは、笑うと細い眼がいちだんと細くなって、まるででぶの狐のような顔になる。

「えー、ゆきちゃんが家の洗濯をするの？」

「洗濯だけじゃないよ、掃除も洗いものもするよ」

「へえ、じゃ、お姉さんは何をするの」

「はなもうみも何もしないよ、ただその辺に寝っころがって
るだけかなあ」

「ひどいね、それ」

さきちゃんは、^{あき}呆れたといった顔をした。

「でも、はなもうみも大学とか、高校の勉強で忙しいから」

「でもそれはゆきちゃんも一緒じゃないの」

さきちゃんは、心外だというように両手の甲を腰に当て、口を尖らせた。

「まるでシンデレラだな」

ひかる君が、おかしくてたまらないといった塩梅で、くっくっとして笑いをこらえながら言った。

今日は朝から雲一つない青空が広がっている。

昔は、スモッグとかいう公害物質が空に浮かんでいて、晴れていても青空が見えなかったらしい。でも今はそんなことはない。

僕達猫族は、天気が良いと機嫌も良い。

僕はいつも通り河川敷まで出かけ、耕平さんの家に立ち寄ったけれど、耕平さんは仕事に出掛けていて留守だった。家と言っても、くたびれたワゴン車なんだけど。

仕方がないので、僕は場所を変えることにして、もと来た道を引き返すように歩いた。むろん、道路のすみっこをだ。

どうして今日はこんな卑屈な気分なんだ。ネガティブで、

マイナーで、おおよそ自信なんてものが感じられない。

こんな日もある…。

雪が風に舞って沢伝いに吹き下ろしてくる。

寒い日だった。

若い夫婦連れが、沢に沿った道を歩いて行く。二人はお揃いのリュック、黄色いヤッケ、ジーンズに登山靴といった出で立ちだ。

さほど深い山ではないので、それ程の装備は身につけていない。

登山口からちらほら振っていた雪が段々と強くなり、沢に入った頃からは、吹き下ろしてくる雪で、目を開けているのが辛くなっていた。

沢伝いの道をしばらく歩くと、再び山道に入る。枯れた木立やら、南国特有の常緑樹の低木が道の左右につづいている。

雪は容赦なく木立の間を吹き抜けて、二人の行く手を阻んで、足取りを重くさせていた。

登るにつれ、足元の雪は徐々に深くなっていった。

「どうするの、このまま行くの」

女が聞いた。

男は答えようともせず、黙々と雪道を登って行く。女は仕方なくその背中を追いかけて行った。

標高 1100 メートル程の山なので、普段なら往復 5 時間もあれば十分な筈だった。

彼等はそういった心づもりで、ちょっとした雪見気分がてら出掛けようといったことだった。無論、前もって雪になることは解っていたので、今更引き返そうなどとは考えてもいないし、それなりの意地があった。

麓の登山口にあるバス停の横には雑貨屋があった。雑貨屋は川筋に沿った道路に面していて、二間^{にけん}（3.6 メートル）程の間口と、それと同じ奥行きの店舗があり、さらにその奥に川に突き出した六畳の座敷があった。

二人は慣れないバスの旅で疲れていた。なにしろ登山口までの道と言え、舗装はされているものの、とんでもなく狭く、左右の家の軒先が道路に突き出していて、バスが一台や

っと通れる程の幅しかなく、曲がりくねっていて、おおよそ
普段バス酔いをしない人間でも、平気ではいられないといっ
た乗り心地だった。

ふたりは、襲ってくる吐き気を抑えながら、げんなりした
様子で、雑貨屋の店の前に置いてある古びた木のベンチに腰
を下ろし、前かがみになって目の前の通りを見ていた。

雪がちらほら舞い始めていて、すでに所々に積もっている
雪の上に降り掛かっている。

赤い半纏^{はんてん}を着た少女が、積もった雪を避けるようにすこし
小走りに横切って行った。

ベンチの横のガラス戸が開く気配がした。

ふたりが振り向くと、店の中から腰の曲がった老婆が顔を
のぞかせて、ふたりをじっと見つめていた。

「寒かろうけん、中にはいりなさいや」

老婆はふたりを^{いざな}誘った。

雑貨屋の中は薄暗く、細長い蛍光灯が二つ天井からぶら下
がっているだけだった。もちろん、こんな日なのでなおさら
そうなのだろうが。

古めかしい店内はやや雑然としていて、日用品等が並べられて売られていた。

「まあなにもないけどな」

そう言って、老婆は二人に湯呑に入れた茶をすすめた。

奥の座敷には石油ストーブが焚かれていて、座敷の空間をいくぶん暖かくしていた。しかし、それでも体の冷えた彼らには十分な暖かさで、ありがたいものだった。

ふたりは、店舗の土間より一段高くなっている座敷の、上りはなに腰かけて、出されたお茶を両手で包むようにして飲んだ。

「あんたらは、これから山に登りんさるのかな」

老婆が聞いた。

「そうです」

少し間をおいて男が^{こた}応えた。

それを聞くと、老婆は何本か欠けた歯を見せてにんまりと笑った。

「雪が少し降ってきたんで、上はだいぶ^{ふこ}深うなっとなるかもしれん」

山は山岳信仰の社があった。山頂付近には宿舎もあり、以前は登山客の宿泊も頻繁で、けっこう賑わいをみせていた。しかし、今は登山客の減少につれ、宿舎も閉^{とぎ}され廃屋となっている。

登山口には鳥居があり、参門、参道の体をなしていた。よって、この在所は御在所^{ございしょ}と呼ばれていた。

バスは終点で、これ以上奥はない。

「まあ雪が深いゆうても、おささで死んだ者はおらんがのう」

老婆はそう言って、川に突き出た座敷の窓ガラスの向こうを見た。

雪が舞って、川筋を吹き抜ける風が、物悲しい笛の音のようにかすかな音をたてていた。

老婆はなにかを思い出したように、顔を店の中にもどした。

いつの間にか老婆は座敷に居て、目の前には火鉢が置かれ、彼女はそれに手をかざすようにして座っていた。

「いや、一人だけおったな」

「^{てるぞう}照蔵爺さんゆうてな、幕末の生まれで、明治になって皆が髪を散切^{さんぎ}りにしても、ずっと^{まげ}鬘を切らずにおったがな。毎日

山に登るのが習わしで、その日も山に登ったが、夜になってももんて来んかった」

老婆は火箸^{ひばし}でつついて、火鉢の灰の中から赤く燃える炭を掘り起こした。

「その次の日になって、皆が探しにいったら、河原にたおれちよるのが見つかってな、それが不思議なことに、素っ裸でなにひとつ身につけてなかったそう。皆は狐か狸にばかされたにちがいないゆうてな。わしが小さい頃のことながな」

言い終わって、老婆は静かに茶をすすった。

いったい何時^{いつ}の話なんだろうと、男は不思議な感覚にとらわれた。

山の中腹を過ぎたあたりから、雪はさらに強さを増し、時には辺りが真っ白になって、5メートル先も見えなくなる時があった。

急に、目の前に壁のような傾斜の坂が現れた。そこは枯れた滝のような状態で、45度ほどの斜面に飛び出している岩を、踏みしめながら登った。

やがて気がつく と、足元は膝のすぐ下まで埋まる雪で覆われていた。

どれくらい登ったのだろう、皆目見当もつかない、辺り一面は雪だ。真っ白な世界がそこにある。

女が雪の上にしゃがみ込んだ。目の前はすぐ下が傾斜になって落ち込んでいるが、それもはっきりとは見えない。

「もうだめ」

困ったような顔で男が女を見た。

「そう言っても、引き返せないよ」

女は答えずに肩で息をしている。雪の歩行は彼女の体力をかなり奪っていた。

「こんな時は、無理にでも笑えば元気が出るよ」

「笑えるわけないでしょ、まぬけなこと言わないでちょうだい」

女は語気を強めた。

男はさらに困ったように笑ったが、笑うとその顔がひょっとこのようになった。

それを見て、女は思わず口元がゆるんだ。

「本当にそうね」

女は苦笑いをしながら答えた。

風に雪が舞った。

その風に乗って何かが聞こえてきた。

「泣き声じゃない？」

男は耳を澄ませた。

風の音のようにも聞こえるが、確かにそれは泣き声のようだった。

「だれかが泣いてるわ」

女は泣き声のする方を探そうと、眉間にしわを寄せ目を斜めに振った。

「向こうかしら」

女はそう言うと、声のする方へ歩き始めた。深い雪にもかかわらず彼女の歩みは力強かった。

男は、置いて行かれまいと慌ててそのあとを追った。

二人は、声のする方へ導かれるように進んでいった。雪は足元からみついてきたが、不思議と苦にならなかった。

やがて二人は広場になっているところに出た。その頃には、

雪はほとんど止んでいて、辺り全体が見渡せるようになっていた。

そこは建物の前庭で、目の前には古い廃屋があった。二人の立っているすぐ目の前に入り口があって、一間（1.8メートル）の何も取り付けられていない暗い間口が開いていた。何らかの扉が以前はあったのだろうが、今はそれも失われている。

泣き声はその奥から聞こえてきていた。

二人はその開かれた入り口から中に入った。中は土間になっていて、そのすぐ奥には座敷らしきものがあったが、すでに畳は腐って^{ふく}膨れ上がり、その表面は大きく波打っていた。

座敷の中ほどに乱雑に布団が積み重ねられていて、泣き声はそこから聞こえていた。

男は一瞬ためらったが、女はその声に吸い寄せられるように土足で座敷に上がり込んだ。

積み重ねられた布団の隙間にはまり込むようにして、粗末な着ぐるみに包まれた赤ん坊が泣いていた。

女は赤ん坊をそっと抱き上げた。

その子は瘦せていて、女が抱き上げてもしっこうに泣き止む気配はなかった。

「誰？」

後から来た男が覗き込んだ。

「わからないわ」

「でも、お腹は空いていそう」

女は赤ん坊をじっと見つめた。

「ミルクあるよ、コンデンスミルクだけど…」

少し間を置いて男が言った。

「なんでもいいわ、お湯を沸かしてちょうだい」

男はリュックの中から、缶詰のコンデンスミルクと、ガスバーナと携帯用のアルミの食器類を取り出し、その辺りの雪を鍋に放り込んだ。

赤ん坊は、ミルクを飲ますと落ち着いた様子で、ようやく泣き止んで、すやすやと眠り始めた。

二人は、その子をもとの布団の中に戻すと、へたり込むように畳の上に座り込んだ。朽ちた畳とはいえその上は暖かく、緊張していたものが一気に緩んで行くのが感じられた。

「君の母乳でもやればよかったのに」

「あなたのそのつまらない冗談にはうんざりするわ。^{うみ}海を生んだのは二年前なのよ」

男は、しまったという様に横を向いた。

その日はその宿舎に泊まった。

二人は、持ってきていたペグとロープ、ハンマーで、古い布団を使って畳の上に即席のテントを作った。

朽ちた畳は、容易にペグを打ち込むことができた。そうやって作り上げたテントの中は暖かく、外とはまるで別世界のような空間が出来あがった。

翌朝は晴れていた。

宿舎の前庭は、真っ白な雪原になっていて、朝の光がその表面をなぞるようにして、細かくきらめかせていた。

山頂の方を見上げると、あと300メートル先にそれはあった。しかし、彼らにはそこに行くための体力的余裕はなく、そこに行かなければならないという理由も気力も失っていた。

二人は、下山の準備をととのえると、持ってきた不要な物は捨てた。その代り、昨夜のうちに、そこら辺りの木を切って作った背負い子に、拾った赤ん坊を乗せて男が背負った。

玄関から外に出ると、昨夜は気付かなかったが、建物は地面より少し高い位置にあって、雪に埋もれてはいたが、コンクリートの階段があるようだった。

そのすぐ横の雪の上に、半分雪に埋もれて動物の死骸があった。

「なにかしら？」

「狐か、狸だろう」

その大きさからすると、そういったものの骸のように見えた。

ふたりは赤ん坊を背負い、やっとのことで麓のバス停までやってきた。バス停の前はすっかり雪景色に変わっていて、道路も車の轍以外は雪に埋もれていた。

とりあえず二人は休みたかった、そして何より赤ん坊のミルクを手に入れたかった。

二人は、登る前に寄った雑貨屋の入り口に立った。しかし店は閉まっていて、内側に黄色く変色したカーテンが引かれて、老婆は留守のようだった。

二人は困って、暫く中の様子をカーテン越しに伺っていたが、あきらめて少しそこで待ってみることにした。老婆の足では、そんなに遠くに出掛けているとは思えなかった。

二人の携帯電話の電池はすでにきれている。

二人が赤ん坊を抱えてベンチに座っていると、通りがかった男が声をかけた。

「どうしたか？」

男はクリーム色のウインドブレーカーと、長靴履きといった軽装で、近所の人間らしかった。

「ここのお婆さんを待ってるんですよ」

近づいていく男に答えた。

「ばあさん？」

男は^{けげん}怪訝な顔をした。

「ここは誰も居らんがよ、ばあさんは二十年前に死んだが」

二人は驚いて男を見た。

「いや、でも、昨日はいましたよ」

「そんな訳はないがよ、わしが子供の頃はよう駄菓子を買いに来たがな」

「でもたしかに昨日はいたんですよ」

「疲れて夢でも見たんやないが？」

二人の表情は、不可解なものに接したそれに変わった。

「いや、昨日、僕達はここのお婆さんに、中に呼ばれて奥の座敷でお茶を飲んだんですよ」

それを聞くと、男はさらに怪訝な表情をした。

「たしかに、この奥には座敷があるかの…」

二人と男は、それぞれ一様に黙り込んだ。

川伝いに集落があった。橋の向こう側には石の鳥居があって、それをくぐれば登山口へ、右へ下れば鎮守の森があった。

それらすべてが雪の中にあった。雪に埋もれた里はまるで桃源郷のようで、北風がゆるく吹いて、低い山間の開けた田園を渡っていった。凜とした空気が支配して、ちぎれた雲が流れてゆく、元日の午後だった。

僕は、このところ、朝の商店街の散策は早めに切り上げて
いる。

近頃はどうも世知^{せちがら}辛く、あまり、おこぼれにあずかる事が
少なくなった。だから、何時までもウロチョロしていても意
味がないという訳なのだ。

僕がほとんど毎日通る櫓の並木通りから、少し入ったとこ
ろに、今はだれも住んでいない古い木造の洋館がある。廃屋
同然なのだけれど、持主はきっといるんだろう、取り壊され
もせずそこにある。

僕は時々そこに寄って、庭の草叢で毛づくろいをしたりす
る。新緑の季節が終わると、僕の嫌いな雨の季節が始まる。
それまでは、のんびりと日向ぼっこを楽しもうと思っている。

建物の玄関は、古めかしい建具でちょっと粋^{いき}な造りになっ
ているが、僕は中に入ったことはない。

僕は、しばらくそこに居て、再び櫓通りに出た。通りに出
たところで、向こうからゆきちゃんがやってくるのが見えた。
しかし、なんだか元気がない、おまけにこの時間ではおもい
っきり遅刻だ。

ゆきちゃんは、力なく重い鞆を背^{しよ}負って僕の前までやってきた。

「おはよう、ゆきちゃんどうしたの」

僕はゆきちゃんの顔を見上げた。

「ああ、サダハル少し疲れたの」

ゆきちゃんはその場にしゃがみ込んだ。

「大丈夫かい？」

ゆきちゃんはどうもうつむいたまま何も答えない。

僕は小さな猫なので、ゆきちゃんの背中をさすってやることもできない。非力な僕は彼女を助けてやれない。

僕がゆきちゃんの手をなめると、ゆきちゃんは伏せた顔をあげて、僕を見た。

「すこし休みたいの」

「いいよ、歩けるかい？」

ゆきちゃんのはろのろと立ち上がると、僕について歩いた。

僕達は、僕が今来たばかりの道をたどって、僕がくつろいでいた洋館にやって来た。

ゆきちゃんは随分と辛^{つら}そう、僕が寝そべっている草^{くさむら}叢で

休ませる訳にもいかない。僕は木造の洋館のその粹なドアの前に立った。ゆきちゃんはもたれ掛かるように、ドアノブを回した。

ドアは小さく軋み声をあげて内側に開いた。カギは掛かっていなかった。

中は薄暗く、何か所かあるガラス窓から、庭の緑を反射した光が差し込んでいた。床はうっすらと埃が覆っているようだった。

ゆきちゃんは鞆を床に下ろすと、それにもたれ掛かるように座り込んだ。

「大丈夫かい？」

「僕が今から、きみの家の人か、お医者さんをよんでこようか。僕には常太郎って便利な友達がいるから、それくらいのことにはできるよ」

ゆきちゃんは返事をせずに、自分で鞆を枕代わりにして横になった。

「常太郎君ね、サダハルがよく言っている」

「でもいいのよ、こうしていれば少し楽になるから」

「よくはないよ、きっとどこかが悪いんだよ」

僕は、常太郎を呼びに行こうとゆきちゃんの傍を離れようとした。

「私が何だか知ってる？」

僕はゆきちゃんを振り返った。

「君はゆきちゃんだろ」

「私は狐なのよ」

僕はあっと思った。そうだゆきちゃんは狐だったんだ。だから僕とこうやって話をしてるんだ。僕はそのことを忘れていた。

「ああ、そうだったね、すっかり忘れていたよ」

ゆきちゃんはにっこりと笑った。

「でも、きっと病気なんだから、お医者さんに診てもらわなくちゃいけないよ」

「病気じゃないのよ、サダハル」

「じゃ、なに？」

「私はもうお婆さんなのよ」

ああそうだったんだと、僕は気付いた。

野生の狐なら、もうとっくに死んでてもおかしくない。

「もう、死んじゃうのかい」

僕はゆきちゃんに聞いた。

「そうね、そうだと思うわ」

ゆきちゃんは少し苦しそうに息をした。

「中学生が死んじゃうなんておかしいよ」

「ほんとうね」

ゆきちゃんは薄い唇でほんのちょっと笑った。

「待ってて、常太郎を呼んでくるから」

「ああ、常太郎君ね、会いたいな。それと、お母さんにも、
会いたいな」

僕は洋館を飛び出して常太郎の家へ急いだ。

いつもはのんびりと歩く道だけど、今日はどこをどう通ったか覚えていない。気がついたら、常太郎のマンションの扉の前に立っていた。

僕はその前でニャアニャアとうるさく泣いた。

常太郎のママが扉を開けて、僕を見た。

「あら、サダハルじゃないの」

パン屋で会っても分からないが、ここだと分かるらしい。

僕はママの横をすり抜けて、中に入った。ママはあからさまに嫌な顔をしたらろうけれど、僕はその顔を見ていない。

常太郎は居間に居て、僕が入ってくるのを見ると、僕を奥の部屋に抱えて行った。常太郎はまだ二歳なのだがなかなかの力持ちだ。

「何の用だい」

部屋に入ると常太郎は僕に聞いた。

いつもなら、ここであれこれ言い返すところだが、今日はそんな時間はない。

「手伝ってくれ、ゆきちゃんが死にそうなんだ」

「ゆきちゃんて、中学生の狐の？」

「君の友達だったよね」

「急いでるんだ、話は道々^{みちみち}話すから、とにかく来てくれ」

常太郎は僕の様子を見て、驚いた顔をしたらけれど、小さくわかったと、言った。

常太郎は、ママに隣の部屋で寝ていると思い込ませ、若いお兄さんの姿で家を出た。

常太郎には変わった能力があって、他人になんでも思い込ませることが出来る、ただし、自分に関してだけらしい。そしてちびのくせに何でも喋る。

僕は常太郎と道を急ぎながら、ゆきちゃんの事を話した。

僕達は^{あきや}空家の洋館の草叢を踏み分けて、入り口に立った。草叢はそんなに深くはないけれど、僕と常太郎にとってはそれなりの高さがある。

ゆきちゃんは鞆を枕に横たわって、目をつぶっていた。

僕はゆきちゃんのそばに寄って、床に置かれた手のひらを舐めた。

常太郎が近寄ってきて僕を見た。

「ねてるのかい？」

僕はニャアと鳴いた。

常太郎の目から涙が溢れてくるのが見えた。

「泣いてるのかい」

「みんな誰でも死ぬんだよ、ゆきちゃんは十分生きたんだ」

「僕は、君のように人の死が悲しくなくなるほど、生きちゃいないんだよ」

常太郎は言った。

ゆきちゃんは横になったまま、にっこりと笑っていた。やがてゆきちゃんはもとの狐の姿に戻るだろう。

僕達は、暫くそこに立っていた。

「常太郎、お願いがあるんだけど」

僕は静かに言った。

「いいよ、僕のやることはわかってる」

「遅いわね、ゆきは何をやってるのかしら」

「どうせ、またどこかで寄り道してるんでしょ。あいつ、そうやって、すぐ掃除さぼろうとするんだから」

ゆきちゃんの姉の海がソファーに寝っ転がったまま答えた。

「でもちょっと遅いでしょ」

お母さんは、台所に立って洗いものをしていた手を止めて、目の前の居間の壁を見た。時計の針は、午後八時を指そうとしていた。

玄関のチャイムが鳴った。

お母さんは、はじかれたように、洗いものをしていた手を
いそいで拭くと、台所を飛び出した。べつに急ぐ必要はない
筈なのに、なぜかいたたまれない気持ちが、彼女をそうさせ
ていた。

「ゆきだわ」

彼女が玄関のドアを開けると、ゆきちゃんが重い鞆を背負
って立っていた。ゆきちゃんは普段通りにここにこしている。
お母さんはほっとしたけれど、すぐに「遅いじゃないの、ゆ
き」と少し強い口調で言った。

こんな時、ゆきちゃんはすぐにごめんなさい、と笑顔でこ
たえるのだけれども、今日は笑顔のままなにも答えなかった。

「どうしたの、ゆき、早く上がりなさい」

お母さんは眉に皺を寄せて、心配そうにゆきちゃんを見た。

「ごめんなさい、上がれないの」

「どうしたの、べつに汚れててもいいから、上がりなさい」

「そうじゃないの」

「じゃ、どうしたの」

「私、もう、この家にはかえれないの」

お母さんは、えっとかすかに声をあげた。

「何を言っているの」

「私、もう行かなくちゃ」

「行くって、どこへいくの？」

ゆきちゃんは暫く黙っていた。

お母さんは、困った顔をゆきちゃんに向けたまま、言葉を探そうとしていた。

「ゆき、ばかなことを言っていないで、早く上がりなさい」

お母さんは、もう一度ゆきちゃんにやさしく言った。

「ありがとうお母さん、私を育ててくれて」

ゆきちゃんは言った。

彼女の頭の中に、雪山でゆきを拾った情景が突然^{よみがえ}蘇って
きた。

「さようなら、お母さん、私を探さないで」

ゆきちゃんは薄い唇を広げ、目を細めていつも通りに笑い、
そして、お母さんに背を向けると、外の闇に溶け込むように
出て行った。

お母さんは、少しの間立ち尽くしていたけれど、それはほ

んの少しの時間だったのだけれども。

お母さんは、大声でゆきちゃんの名前を呼んで、裸足^{はだし}で駆け出していった。

外には、二歳の常太郎と僕が立っていた。

お母さんは僕達のことなんか気づきもしなかったろう。

「あれでよかったのかな」

「いいんじゃないのか」

「帰ろうか、ママが心配するよ」

「そうだね」

やけに素直に常太郎が答えた。

「ところで、それは何だい？」

帰る準備をした常太郎を見て僕が言った。

常太郎は長身で、白いスーツと白い靴、おまけに白いネクタイと何から何まで白づくめで、まるで昭和のやくざ映画から抜け出してきたような恰好をしていた。

「僕はちびすけなんだから、暗い夜道を歩くにはこれくらい目立たないと、車に轢^ひかれてしまうだろ」

「なるほど、そうだね」

僕には常太郎の気持ちが痛いほどよくわかった。

僕は、車のよく通る暗い夜道を、その派手な格好をした常太郎と一緒に帰って行ったのだった。

